

中高年夫婦二度目の青春 ——新たな夫婦関係「卒婚」を中心として——

張 娜（広島大学）

1. 問題と目的

2004 年、フリーランスライターの杉山由美子は中高年夫婦の生活様式を再検討するため、『卒婚のススメ』という本を出版し、8 組の夫婦の生活様式を参考にして「卒婚」という概念を提唱した。卒婚とは、結婚を卒業するという意味で、夫婦二人の婚姻関係は解消せず、それぞれの道に進んでいくライフスタイルである。「卒婚」は離婚を回避するための一つの対処策として、離婚よりも「前向き」な選択肢とされていた。杉山が構想した卒婚では、子育て終了期または定年後のライフコース後期において、伝統的性別役割分業からの脱却を前提とし、夫婦関係がより対等なものとなる。夫婦双方が、公的領域と私的領域における役割交換を行うことで、第二の人生である二度目の青春を楽しむことができると考えられている。

しかしながら、「卒婚」は社会的には広く受容されていないように見受けられる。杉山の著書に登場するカップルの多くは、比較的中・高所得層に属している。また、夫婦間の役割交換に関しても、男性側の抵抗感が相対的に低く、妻のキャリアや生活スタイルを支援する姿勢が多く見られる。そこで、一般層において「卒婚」がいかなる位置づけを有しているのかについて検討したい。杉山が提唱した卒婚を参照しながら、より普遍的な一般事例の収集を行い、卒婚が出現した要因及びその実態、さらに卒婚が広がりを見せない要因を明らかにしたい。

2. 方法

本報告では、2005 年に「卒婚」の概念が初めてメディアに登場して以降、2025 年までに報道された一般的な事例を対象として、新聞記事を中心に収集を行った。調査対象とした新聞は朝日新聞、読売新聞、毎日新聞の 3 紙である。「卒婚」をキーワードとして各データベースで検索したところ、記事は総計 94 件であったが、内容の関連性によって判断して利用可能な記事は 63 件であった。さらに一般事例を確保するため、社会的あるいは経済的属性・ライフコースの多様性を考慮し、分析可能な代表事例を計 30 件抽出した。

3. 考察

杉山の提唱した卒婚を実現するためには主に三つの条件がある。第一に、後半生の自立生活を支える経済的基盤があること。第二に、男女双方が理想を共有し、互いに譲り合いながら継続的にコミュニケーションを保つこと。第三に、男女の役割交換を行うため、女性が公的領域への進出を通じて、自己実現を図る一方、新たなアイデンティティの構築が求められること。同時に、私的領域に入る男性は、家事遂行能力や対人関係能力の学習が不可欠となる。当時の団塊夫婦の後半生においての役割交換では、妻が私的領域から公的領域へ、夫が公的領域から私的領域への役割移動が多く見られる。

このような条件においては、一般的事例において卒婚を実現することは困難であると言える。まず堅実な経済的基盤を有する者は少数派である。また、団塊世代の夫婦においては、理想を共有はおろか、日常的なコミュニケーションすら十分に行われていない場合が多い。さらに、ジェンダー規範の固定性により、男女の役割交換は困難で、一般事例においては役割の交換よりも、まず個人の独立が優先されることがある。

以上のことから、杉山による卒婚の概念は、社会全体における「卒婚」の受容状況や実態とは必ずしも一致しないことが明らかとなった。しかし、卒婚は中高年夫婦に新たな親密関係を提示し、伝統的性別役割分業に基づくジェンダー規範に疑問を投げかける点は重要な意義を有している。とりわけ、家族の個人化が進展し、個人の選択が重視される現代社会において、卒婚は結婚や家族のあり方を再考する契機となり得る。今後は、卒婚が団塊世代に特有の現象であるかどうかを検討し、その社会的意義を再評価するとともに、社会的変化に伴い新たな卒婚の形態が出現する可能性について考察したい。

参考文献：杉山 由美子（2004）『卒婚のススメ：後半生もハッピーに生きるため、結婚のかたちを変えてみる』オレンジページ

（キーワード：中高年夫婦 卒婚 役割交換）